

## **罪の奴隷か、神の奴隷か**

ローマ人への手紙 6章 15-23節

### **はじめに**

先週に引き続き、使徒パウロの言葉から「自由」について学びたいと思います。

### **1. 律法主義か、無律法主義か**

パウロは 15 節で、「では、どうなのでしょう。私たちは律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから、罪を犯そう、となるのでしょうか。決してそんなことはありません」と言っています。

イエス様を信じる人は誰でも、「律法の下」にではなく、「恵みの下」にあります。「律法の下」にあるというのは、神様の律法を守り行うことによって、神様の御前に義と認められ、救われようとする生き方です。逆に「恵みの下」にあるというのは、自分の罪を認めて悔い改め、イエス様を救い主と信じることによって、神様の御前に義と認められ、救われようとする生き方です。

イエス様を信じる人は誰でも、「恵みの下」にあります。神様の律法を守り行うことによってではなく、イエス様を信じることによって救われます。しかしそうすると、いつの時代でもこう考える人が出てくるのです。「イエス様を信じることによって救われるなら、もう神様の律法を守り行わなくてよいのではないか。どれだけ罪を犯したって、どうせイエス様の十字架によって赦されるのだから、多少の罪を犯したってかまわないのではないか」。

イエス様を信じてクリスチャンになった人は、二つの立場に陥る傾向があります。一つは「律法主義」で、もう一つは「無律法主義」です。「律法主義」は、イエス様を信じて恵みによってクリスチャンになったにも関わらず、良い行いをしなければ救われないのではないかと考えます。良い行いをすれば神様が自分を愛してくれて、良い行いをしなければ神様が自分を愛してくれないと考えます。「律法主義」にとって、神様の愛を得る規準は、「イエス様の贖い」ではなく、あくまでも自分の「良い行い」なのです。ですから「律法主義」は必死に良い行いをし、良い行いができていない時には不安に陥ります。そのため「律法主義」は、救いの確信を持つことが難しく、信仰生活に疲れを覚えていきます。

逆に「無律法主義」は、イエス様を信じて恵みによって救われたのだから、もう神様の律法をそんなに一生懸命に守り行わなくてよいのではないか、どうせ赦されるのだから、多少の罪を犯したってよいのではないかと考えます。

私たちは、「律法主義」にも「無律法主義」にも陥ってはなりません。私たちは、「律法主義」でもなく、「無律法主義」でもなく、第三の道を歩まなければなりません。それは、イエス様を信じて恵みによって救われたからこそ、神様の律法を精一杯守り行っていくとい

う「福音主義」の立場です。

## 2. 罪の奴隷か、神の奴隷か

パウロは今日の聖書箇所で、特に「無律法主義」に陥らないようにと注意しています。16節には、「**あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります**」とあります。パウロはここで、私たち人間には二つの道しかないと教えています。一つは「罪の奴隷」として生きるか、もう一つは「従順の奴隷」、つまり「神様の奴隷」として生きるかです。

聖書が語る「罪」とは、神様の律法に従わないことです。神様の律法は、モーセの「十戒」の中に要約して書かれていますけれど、その中心は「神様を愛し、隣人を愛する」ことです。その意味で聖書が語る「罪」とは、神様を愛さず、隣人を愛さないことと言えます。つまり聖書が語る「罪」とは、神様も愛さず、隣人も愛さず、ただ自分だけを愛して生きること、自分のことだけを考えて、自己中心に生きることと言えます。

「罪の奴隷」として生きるとは、自己中心に生きること、つまり自分の欲望に従って生きることです。逆に「神様の奴隷」として生きるとは、神様中心に生きること、つまり神様の律法に従って生きることです。パウロは、私たち人間にはこの二つの道しかないと教えています。つまり、自己中心に自分の欲望に従って生きるか、それとも神様中心に神様の律法に従って生きるかです。

## 3. 罪の奴隷から神の奴隷へ

パウロは17-20節で、「かつての私たちの姿」と「今あるべき私たちの姿」について語っています。「**神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となりました。あなたがたの肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。以前あなたがたは、自分の手足を汚れと不法の奴隷として献げて、不法に進みました。同じように、今はその手足を義の奴隷として献げて、聖潔に進みなさい。あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義については自由にふるまっていました**」。

聖書は、私たちすべての人間は、アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持って生まれてくると言います。その意味で、すべての人間は生まれながらに罪に支配されていると言えます。つまり、神様も愛さず、隣人も愛さず、自己中心に生きる性質に支配されているのです。それが私たちの生まれながらの姿、つまり「罪の奴隷」としての姿です。

「奴隷」は、自分の力では自由になることはできません。誰か他の主人が代価を払って自分を買って取ってくれなければ、決して自由になることはできません。私たちも、自分の力では自己中心の性質から抜け出すことはできません。しかし神様は、御自身のひとり子であるイエス様の命を代価として払って、私たちを御自身の奴隷として買ってくださったの

です。それがイエス様の十字架の死の意味です。

私たちは、生まれながらに「罪の奴隷」でしたけれど、イエス様を神の子、救い主と信じることによって、「神様の奴隷」とされるのです。イエス様を信じる人は誰でも、もはや「罪の奴隷」ではなく、「神様の奴隷」なのです。従うべき主人は、「罪」ではなく「神様」とされたのです。私たちにはもう、罪に従う義務はないのです。むしろ私たちは、神様に従う義務を負っているのです。

パウロは、「あなたがたの肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています」と言います。聖書には、イエス様を信じる人は誰でも、「神様の子ども」とされるとあります。そしてイエス様は、神様を「父」と呼ぶようにと言われます。しかしパウロはここで、イエス様を信じる人を、「神様の子ども」ではなく「神様の奴隷」と呼びます。それは、私たちの「肉の弱さ」のためです。「神様の子ども」という言い方は、愛や親しさが強調されます。しかし「神様の奴隷」という言い方は、従順が強調されます。パウロは、「私たちは恵みの下にあるのだから、罪を犯そう」と考えている「無律法主義」の人たちに、神様への従順、律法への従順を教えるために、あえて「神様の子ども」ではなく、「神様の奴隷」という言い方を使ったのです。「無律法主義」の人たちに、「神様の子ども」と言い方をすると、「肉の弱さ」のために甘えてしまうからです。

#### **4. 罪の奴隷の行き着くところと神の奴隷の行き着くところ**

パウロは、「罪の奴隷」として生きる時の結末と「神様の奴隷」として生きる時の結末について、21-23節で語っています。「**ではそのころ、あなたがたはどんな実を得ましたか。今では恥ずかしく思っているものです。それらの行き着くところは死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得ています。その行き着くところは永遠のいのちです。罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。**」

「罪の奴隷」とは、神様を愛さず、隣人も愛さず、ただ自分だけを愛して自己中心に生きることです。そのような人生の結末は、「死」だとパウロは言います。聖書が語る「死」とは、「分離」を意味します。肉体の死は、魂と肉体の「分離」であり、霊的な死は、神様と私たちの「分離」です。「罪の奴隷」として生きる結末は、神様から永遠に捨てられる「霊的な死」です。それは、永遠の苦痛を伴う「地獄の刑罰」です。

「神様の奴隷」とは、神様を愛し、隣人を愛し、神様の律法に従って生きることです。そのような人生の結末は、「永遠のいのち」だとパウロは言います。聖書が語る「いのち」とは、「共にいる」「交わり」を意味します。「神様の奴隷」として生きる結末は、神様と永遠に共にいる「永遠のいのち」です。それは、永遠に愛と喜びに包まれる祝福です。

#### **おわりに**

私たち人間は、生まれながらに自己中心の性質を持って、「罪の奴隷」として生まれてきました。しかし神様はイエス様を信じる私たちを愛し、イエス様の十字架によって、イエス

様の尊い命を代価として払って、私たちを御自身の奴隷としてくださいました。

私たちには、二つの道しかありません。「罪の奴隷」として生きるか、それとも「神様の奴隷」として生きるかです。「罪の奴隷」として生きる道の結末は、神様から永遠に捨てられる「霊的な死」です。そして「神様の奴隷」として生きる道の結末は、神様の愛と喜びの中で永遠に生きる「永遠のいのち」です。

イエス様を信じる人はすでに「神様の奴隷」とされています。しかし「神様の奴隷」とされているにも関わらず、神様に従わず、「無律法主義」として自己中心に生きようとするなら、その人は実は「罪の奴隷」のままであったのかもしれないし、その結末は「霊的な死」です。

17 節でパウロは、「神に感謝します」と言っています。「罪の奴隷」から「神様の奴隷」とされた人は、神様への「感謝の心」を持ちます。「霊的な死」から「永遠のいのち」へと導かれたのですから。「神様の奴隷」は、神様に嫌々従うものではありません。感謝の心を持って、愛と喜びをもって主人である神様に従うのです。

私たちは、「律法主義」にも「無律法主義」にも陥ってはいけません。私たちは、救われるために「神様の律法」を守り行うことはしません。イエス様を信じるだけで救われるからです。しかし私たちは、「罪の奴隷」から「神様の奴隷」とされた者として、感謝の心と愛と喜びをもって、「神様の律法」を守り行います。救われるために「神様の律法」を守り行うのではなく、救われたからこそ「神様の律法」を守り行うのです。

私たちイエス様を信じるクリスチャンの歩みは、「罪の奴隷」から「神様の奴隷」とされた者として、地上の生涯を「神様の律法」を守り行って、「聖潔」に歩み、「永遠のいのち」に至る歩みなのです。

天におられる父なる神様。

私たちは、生まれながらに自己中心の性質を持ち、「罪の奴隷」として生まれてきました。しかしあなたが私たちを愛し、イエス様の十字架を通して、「罪の奴隷」から「神様の奴隷」としてくださいました。私たちが従うべき主人は、自分の欲望ではなく、神様あなたです。どうか自由にされた者として、感謝と愛と喜びをもって、あなたに心から従っていくことができますように。この祈りを私たちの贖い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。